
あかいくに

赤星有記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかいくに

【Nコード】

N9323H

【作者名】

赤星有記

【あらすじ】

絵が好きな内気な少年ユキヲの家へ、異国の少数民族の巫女姫だという少女ミツメが長兄に連れられてやってくる。初対面から彼女に強く惹かれるユキヲだが、二人の間の隔たりは大きいのだった。価値観の違う国で育った少年と少女の出会いのお話です。

第一章

左手を横に倒し親指をぴんと立てる。

根元から曲げた右手の四本指をそれに組み合わせて電気スタンドの前にかざすと壁に黒い犬の頭部が映った。

並んだ親指で作られた耳をひくひくと動かした後、左手の小指を動かして「わんわん」と鳴かせる。

こうすると――「わんわん、じゃないだろう。犬の鳴き声は、ぼおう、ぼおう、だ。ユキヲ」といつもすかさず訂正をいれてきた彼女のことを思い出さずにはいられない。

彼女の国では犬の鳴き声を擬音で表す時は「ぼおう、ぼおう」なのだそうだ。

鳴き声というよりは、火が燃え盛る様を表しているようだと僕が返すと、「わんわん」こそ、奉納歌をへたくそに歌った時のこだまのようだと唇を尖らせていた。

奉納歌、という聞き慣れない言葉を日常のたわいのない会話に盛り込むのは彼女が巫女だったからだ。

高い山々に囲まれた異国の地に生きる少数民族の巫女姫だ。

彼女が僕の家滞在了たわずかな日々は、その後の僕の人生に大きな影響を与えた。

何よりも、今も食うや食わずでイラストの仕事なんていうのをしてるのは彼女のせいなのだから。

そして――この影絵の犬が、とても大事なものになってしまったのも。

初対面の日のことは今でもすぐに思い出すことが出来る。

僕の故郷もまた山に囲まれたようにして在る小さな土地で、しかし、その山々は彼女の国のものように険しい線と灰色の肌は持つておらず穏やかな緑色の草木を蓄えた斜面の線はなだらかなものだった。

あの日、十歳の僕はそんな山のなかの小道を登っていた。

小道の両脇は浅い谷間になっていて、初夏独特の微光を纏う緑が茂っていた。

一番底の小川が流れているあたりには、葉と一緒に白い花卉が見え隠れしている。

初夏にいつも咲くこの花は最初に小川の周辺に姿を現し、やがては谷間一面に緑と白の爽やかな模様を描いていくのだ。

小道を登っていくと、やがて階段の踊り場のように開けた場所につきあたる。

草に囲まれた楕円形のそこは僕の避難場所だった。

その頃の僕はよく感情をぐちゃぐちゃにする子供だったので、気持ちを落ち着かせるために一人になれるそういう場所を必要としていたのだが、あいにく、上に三人もの兄がいた。

長兄は家を出ていたが十六歳の次兄と十三歳のすぐ上の兄は共同の部屋のなかで思う存分のさばっていたので避難場所どころか蒲団をしつ場所を確保するのさえ大変だというありさまだった。

だから、僕はそれを外に探し、そうして見つけたその場所に向かうときは大抵半泣きだった。

その時も半泣きでおまけに右手に宝物であるはずのスケッチブックを乱暴に振り回しながら歩いていた。

モスグリーンの厚紙が表紙のA3サイズのスケッチブックは一年前、九歳の誕生日に祖母が買ってくれたものだった。

お小遣いなんて制度はうちには無かったから、何か欲しいものがある時は親か祖母に頼むか、自分で稼ぐしかない。

兄二人は新聞配達や、どういうツテでか学校の設備を利用してネットなどで儲けていたらしいけど、僕にはそれも出来ずにいたので（牛乳配達はいまりの手際の悪さに一日でクビになってしまった）それを思いがけなく祖母から与えられた時は嬉しいことこのうえなかった。

祖母は当時の家内で唯一僕にまともに取り合ってくれる人だった。僕は何かにつけて勘の鈍い子供だったので両親や兄達をよく苛々とさせており、話をしている途中で「ああ、もういい」と遮られてしまうことがよくあった。

祖母だけがいつも最後までつきあってくれた。

年寄りには時間が流れるのがゆっくりだからお前ののろさが気にならないんだろうよ、などと口の悪いすぐ上の兄にからかわれたことがある。

僕はまず、スケッチブックの紙の表に絵を描き尽くし、その後裏にも描き、ついには表紙になっている厚紙の裏までも絵で埋め尽くしてしまった。

人に見られるのが嫌でこっそり描いている僕をからかうために、留守の間に三兄が卑猥な落書きをした時は、生まれて初めて自分から兄に飛びかかっていった。

もちろん、あっさりと返り討ちにされてしまったけれど。

ちっとも上手くなく、はっとさせられるものでもない絵で埋め尽くされたスケッチブックは僕にとっては宝物だったのだが―それを、あの日、あの場所で僕は燃やしてしまうつもりだったのだ。

ところが、緑と白に囲まれたその狭い土地には先客がいた。テレビや図書館の本でしか見たことのないようなゆったりとした異国の衣装を着て。

気を緩めて泣き声を出しかけていた僕は慌ててそれを大きなひやつくりに変化させると、来た道を少しだけ下り、緩やかな坂にほんど四つん這いの姿勢になって身を隠した。眼だけで相手の様子を探った。

シンプルなワンピースに大きな緑色の布を巻きつけたような装いをしたその人は、ゆるやかな波を打つ黒髪を背中まで伸ばしていた。背を向けられているのでどんな顔かはわからないけれど背は僕より低いと思った。細い胴体から小麦色の長い手足がひよろりと伸びている。女の子なのは確かだった。

彼女の右腕がおもむろに上へと掲げられると手のあたりが日の光に反射して光った。

刃物を持っているんだな、と僕の鈍い頭が認知した次の瞬間、彼女の体が突然沈み込み視界から消えた。反射的に僕は立ちあがり、相手の動作を追った。

今度は悲鳴を大きなひやつくりに変化させなければならなかった。彼女は手にした刃物を足元に横たわっていた茶色い犬の腹に刺したかと思うと、そのまましばし、動きを止めた。

やがて抜いた刃物に付着した血を左手でぬぐうと、僕が潜んでいる方へと体を向け、まるでお化粧するように唇と頬に塗っていく。赤くなった唇をぺろりと舐め、唾液とともに嚥下していた。

初めて見えた彼女の顔は、僕や周囲の人間と同じ系統のものであったけれども、くっきりとした線で輪郭が描かれた金茶色の両目が違う民族性を証明していた。肌はまんべんなく日に焼けた小麦色だ。

僕は彼女が足元の犬を殺してしまったのかと思った。だが、犬は悲鳴もあげなかったし、死んだ直後に見られるだろう痙攣もなかった。

だとしたら、あれは、もともと死体だったのか。

でも、何故それをこんな風にするのだろうか。

いや、そもそも、この山のなかに何故、異国の女の子がいるんだろう。

街の方では外国人の姿も珍しくなくなっていたけれど僕の住んでいる地域ではまだまだ、皆の注目を集めずにはいられないはずだった。

こんな子がここいらにやって来ていたら、目も耳も敏い次兄あたりの口に乗らないはずはないのに。

彼女がどこの国の人間かなんて僕のとぼしい知識ではわからなかったけれど、行っていることは本で読んだ蛮族の生贄の儀式のように思えて、背中の筋を冷たい水が流れていくような気がした。吐き気がこみあげてくる。また、僕は犬好きでもあったので、殺された（らしい）犬が可哀想で涙も滲んできた。

顔に血を乗せた彼女は僕の存在にもちろん気づいている様子はなく、おもむろに刃物を地に置くと両手を頭上に一度上げ、下げた。

大きな鳥が羽ばたく様を思わせた。

その動作を何回も繰り返し返してやがてくすんだピンク色の唇が尖ったかと思うと、笛の音のような声が聞こえてきた。

どういう発声法なのか、細い声なのに妙に周囲に響く。彼女が歌を歌っているらしいことに気づくのにわずかな時間を必要とした。

歌はゆるやかな緩急をつけて紡がれる。

それに合わせて、彼女の動作も変わる。

―いつのまにか、僕はそれまで感じていたおぞましさを綺麗さっぱり打ち消して、目の前で繰り広げられる舞踏に視線を釘付けにされていた。

彼女の足が拍に合わせて大地を踏むたびに、腕が大気の流れを操るように優雅に回されるたびに、そして衣装の裾が、計算されたか

のように彼女の踊りを引き立ててひらめくたびに、僕の心臓はどくどくと高鳴った。

やがて歌声が一際高くなり、半眼だった眼がすらりと見開かれた。そこから一筋の液体が流れたのを見た時、僕はポケットからちびた4Bの鉛筆を引っ張り出し、唯一まっさらに残っていた裏表紙の厚紙に彼女の姿を写しはじめていた。

それは初めて経験する状態だった。

自分の技術の未熟さとかそれを向上させるための意気込み、もしも人に見せた時の反応はどうなのだろう、とか。普段なら浮かんでくる様々な雑念が少しも出てこず、ただ、ただ、彼女の姿を紙の上に留めるのに必死だった。

留めるのは彼女の姿だけではない。彼女の存在と動作によって周囲に発生しているエネルギーの流れのようなものも同時に描かなくてはいけない。その流れを見るためには、自分の神経もまた限界まで研ぎ澄まさせ、感じたものを手へと伝わらせなければなかった。呼吸をする間も惜しいと感じていた。

―色をつけなければ。

完成間近になった時、ふと頭の片隅にそんなことが浮かんできた。今まで、このスケッチブックには鉛筆画しか描いたことがない。

だけど、この絵を完全なものにするには彩色しなければ話にならない。彼女の周囲に息がむせるような色彩が渦を巻くのを痛いほどに感じてしまっていたのだ。

最初は白、次に青、そして、おそらく踊りが終盤近くなっている今は、見ているこちらにまで熱を感じさせる赤。

燃える赤―恐ろしくも眼が離せないそれは命の力を表しているのだと思った。

これまたうまれて初めての速さで僕は悟る。

白は死と弔い。青は哀しみ。そして赤は命と再生の象徴だ。

彼女の行為は穢れて感じられた生贄の儀式ではなく、死者への鎮魂とその魂の再生をうながすものなのではないだろうか。

少女の右足が大きな動作で大地を踏みしめる。

天上から降る何かを受けるようにしていた腕が下ろされる途中で止まり、手のなかに抱えていたものを振りまくように横にはらわれた。動きが停止した時は、僕も周囲の草木も停止していたように感じた。場を支配していたのは彼女だった。

張られていた瞳が再び閉じられ、また、開かれる。

表情が仮面を脱いだかのようにがらりと変わった。

ふう、と踊り手が吐いた息が再び周囲の時間を流れさせ始める。

僕もようやく金縛りから溶け、はっと我に返った。身を隠すことなんて頭から消えてしまっていた僕の姿を彼女の目が捉え、驚きの表情でこちらを見ている。

目じりが釣り上がっていくその顔の横で、後れ毛が草の香がする風にそよいだ。

今まで彼女の踊りが生んだ色彩に消されていた周囲の色が復活し、緑色の衣をきた黒髪の彼女は初夏の白い花と緑に飾られた。

圧倒的な存在感は既にそこから去っていたけれど、今度は今にも消え入ってしまったような風情がその細い体からだだよってくる。

瞳だけが、そのはかなさから浮いて強い意志を湛えて光っていた。口惜しげに噛み締められた唇は赤い。

踊りを見ていた時とは違う色合いの高鳴りが僕の胸を打ち、耳の後ろが熱くなっていた。

僕は息を吸うと、登ってきた小道を駆け下り始めた。

来た時は燃やす覚悟で振り回してきたスケッチブックを小脇にしっかりと抱えながら。

僕の家は地区の他の家とは少し離れた位置に山と畑に挟まれて建っていた。

秘密の小道のある山をくだった所には帯のように流れる川があり、その上に横たわる橋に差し掛かった位置で家が見えてくる。

あと少しで橋を渡りきるところで、家の方からすぐ上の兄が息を弾ませながら駆けてくるのが見えた。

くせっ毛がぼさぼさになっている。僕にとってはコンプレックスのその髪が、彼の生き生きとした顔の上にかぶさると、うってかわって魅力のひとつになるのは何故だろう。

「どこに行ってたんだよ！お前！」

まさか、僕の心配をして探してくれていたのかと思ったが続けて言われた「人を探してんだ。手伝え」という言葉にそれが勘違いだということを知る。

「ひ、人？」

思わず吃ってしまうと、それが三兄を苛立たせたらしく舌打ちをした。

「サク兄が帰ってきてるんだよ」

「サク兄が？」

去年の春、いきなり大学を中退して外国にボランティアに行ってしまった長兄の名が出てきたことに更に驚く。

「んで、一緒に女の子を連れてきてたらしいんだけど…ちょっと目を離れた先に車の荷台から抜け出してどっかに行っちゃったらしいんだ」

三兄が家の方を指差すと、荷台に幌を張った軽トラックが畑の側にとまっているのが見えた。

「女の子って外国人だよね…」

僕の頭には当然先ほどの光景が思い浮かぶ。

「そうだよ。ほら、世界で一番高い山があるっていう国の――」

三兄の言葉が途切れた。凍りついてしまったような彼の体のなかで、唯一見開かれた目の下瞼だけが痙攣している。

僕の肩越しに何かを見て、恐怖に似た何かを感じたようだ。

そおっと後ろを振り向いた。

橋をゆっくりと渡ってくる人物の両手と顔は血で汚れていた。纏っている異国の衣と顔立ちが綺麗なだけに、その様子はさらに不気味な雰囲気を増している。

家の方から、また誰かが駆けてきた。

久しぶりに会う長兄が僕を押しつけて彼女のもとに駆け寄るまで、橋の上で僕たちは見つめ合っていた。

世界で一番高い山に抱かれた国からやって来た巫女との初対面はそんな風にしめくられ、それからすぐ行われた家族会議で、長兄が彼女を僕達に紹介してくれた。

「施設が急に閉鎖することになってね。しばらく、ここに滞在させて欲しいんだ」

まず、名前と歳を教えてくれたのだが、彼女の名は独特の言語で綴られているものだったので、僕達にはなかなか正しく発音出来なかった。

それを見越していたのか長兄が「ミツメ、とよべばいい」と苦笑する。

ミツメとは三つ目。

見えないけれど彼女のまろい額には神を見る第三の目があるのだそう、元の名前の意味もそれを表しているのだという。

彼女の部族は国教とされているものとは違う独自の古い信仰を守

っており、ミツメがその象徴である巫女だということを兄は続けて語った。僕より二つ年上の十二歳である彼女はあと三年巫女を務めるのだそうだ。

それを聞いて、血塗れの両手と顔という姿で僕達の前に現れた彼女への印象は、三兄のなかでますます恐ろしいものになってしまったらしい。青ざめた頬がひくひくと痙攣していた。それは、次兄、両親も同様らしかった。

「今ちよつと、この子の国がごたごたしていてさ。ほら、ニュースにもよく出ているだろ？だから両親から少しの間安全のために預かってくれて託されたんだ」

「その：その子の両手や顔の血は何なの？」

母が唾を嚥下したあと長兄に尋ねる。

「え？ああ、これは――犬の血かな？ミツメ、もしかしてラリトを葬ってきたのか？」

長兄が血に汚れた彼女の頬に触れようとするさつと身を避けるがその表情には何の感情も見えない。

「犬の血？」

動物嫌いの父と母がしかめた顔を見合わせた。

「その、文化の違いってやつなんだよ。ミツメとうちの国とではまづ宗教形態からして……死んだ者の血肉を重要視していて……」

長兄の始めた難しい話を両親と他の二人の兄はほとんど聞いている様子はなかった。

唯一祖母だけが、どこか面白がるような笑顔をたたえていたけれど彼女はいつでも誰にでもそんな風なので本心はどうだったのかわからない。

僕はというと頬が熱かったのできつと顔を赤くしていたに違いない。

長兄は家にいる間中、母が妬くほどにミツメを大切にしていた。

巫女としての決まりだとかで、人と同じ器を使えなかったり、食べられる物に制限があるらしい彼女のために自ら台所に立った。数日の間、体から血をおとそうとはしなかった―つまり、入浴を拒否していたミツメの体を拭いてあげたりまでしていた。

そんな長兄に対して、ミツメが感謝の笑みを向けたところを見たことがないと言って、母は「巫女がそんなに、えらいのかねえ」とぼやいていた。

僕もそつと観察していたけれど、彼女はいつも無表情だった。

ただ、何度か僕と視線を交わした時は、もともと釣り上がった目尻を更に上げて睨みつけてきていた。

あの、儀式を見たことを怒っているのだろうか。

それとも、儀式の内容を口外するなと脅されているのだろうか。

どちらかわからず、その当時の僕は夜眠れなくなるほど悩んでいた。

来日して七日目、彼女が初めて風呂に入って血を落とす時までそれは続き「ほうら、ユキヲ。可愛くなっただろう」と長兄がまるで自分の娘を自慢するように湯上りのミツメを僕に引き合わせた時は、こういう顔をしていいかわからず、思い切り引きつった笑顔を浮かべてしまった。

しかし、そんな長兄も所属している団体の活動が忙しいらしく、七月になると「ミツメを頼む」と母に告げて再び家を出ていった。また。

ひいきしている長兄の頼みごとなので異議は唱えなかったが、母がミツメの滞在に不安を覚えていることは明らかだった。

動物が嫌いな彼女は、その血を顔に塗りつけるような子にはなるべく近寄りたくはなかったに違いない。

ミツメが犬の血を顔に塗るだけではなく飲み込んでいたことは決

して言えないなあ、と思った。

あの日、刃物で裂いていたのは彼女が可愛がっていたラリトという名の犬だったそうだ。

彼女が兄につれられてこの国にやって来たのは今年の初めのこと。それから、四日前まである施設で暮っていたのだが、もともとラリトはそこで飼われていた犬だったそうだ。

ミツメがとても可愛がるので、異国の地で一人きりの少女を不憫に思った兄はこちらにまで一緒に連れてくることにした。だが。

原因はおそらく、長時間、車に揺られたことによるストレスではないか、と長兄は語った。トラックで空港からこちらに向かう間にその犬はいきなり荷台の上で死んでしまったのだ。気が付いた時は手の施し様がなかったという。

この事件もまた、両親や二人の兄にとっては不気味さを感じさせる要素のひとつだったらしい。

「―あん子がくびり殺したんじゃないと」

母などはある日ぼつりとつぶやいていた。

それはないな、と僕は思ったけれど上手く説明できる自信がなかった。口をつぐんでしまっていた。

長兄は時折電話をかけてきた。

そのたびに嬉しそうに母が出て「なーんも心配いらんよ。ミツメちゃんも皆と仲良くしとるよ」と答えていたがそれは嘘だった。

日常生活に必要なものは与えているけれど両親と二人の兄と彼女の間には常に一線が引かれていた。

彼女の面倒を見てあげなさいよ、と長兄が去った後、母は二人の兄に言った。

兄達は、同じ台詞を「お前は、暇だろう」という言葉を付け加え

て僕に言った。

家でも学校でも僕より力の弱いものはいない。

こうして、長兄がいなくなった後のミツメの面倒はいつのまに僕が見ることになってしまっていたのだった。

ええつとろたえた声をあげる僕を見て祖母がにこにここと笑っていた。

僕は何かしなくちゃ、と焦っていたけれど今まで「お前は出来な
いからやらなくていい」と言われたことはあっても「お前がやれ」
と言われたのは初めてだったのでどうしていいかわからず困ってい
た。

それに、僕は彼女と本当に仲良くなりたかったのだ。ミツメに魅
せられていた。

あの日見た、彼女の作り出すむせるような色彩、特にひとときわ鮮
やかな赤が世界に満ちた瞬間が僕を捕えて離さなかった。

気が小さくて自分からは人と関わりあえなかった僕にとって、自
分のなかにそんな心情が芽生えたことは、驚きでもあり快感でもあ
った。

「：仔犬を見にいかないかい？」

彼女に思い切って声をかけたのは夏休みに入って二日目のことだ
った。

ミツメは長兄の使っていた部屋で寝起きしている。

声をかけて障子を開けると窓際に立って外を眺めていた。彼女の
髪を風がゆらしている。

涼しいけど湿り気の多い風は彼女の故郷に吹くものとは違うのだ
ろうなあと思いながら、僕は部屋に入り込んだ。

彼女と真正面から視線を交わしたのは、あの儀式の時以来だ。
また、睨まれるかと思ったが、何故かそうはならなかった。

2
へ

第二章

そうして、僕と異国の巫女は連れ立って出かけることになった。

それにあたって僕は彼女に服を着替えることを提案した。

ミツメは瞬きをしたあと、自分が纏っている衣装を見て首を傾げる。

「着替える？ どうして？」

「え…と」

その格好じゃこの国では目立つから、とは言いにくくて言葉に詰まってしまう。

長兄から昨日届いた荷物には、彼女のための洋服が何着か入っていた。

自分の国の衣装しか持っていないミツメのことを気にしていたらしい。

同封されていた手紙にも彼女のことばかりで、自分のことが一行も書かれていなかったと母さんが台所で野菜を切りながらぼやいた。

「その、サク兄がさ、せっかく送ってくれた服だからさ…」

うつむいて、指をごちゃごちゃと動かす。

ミツメはその様子を見て首を傾げたが、やがて筆筒を開けるとTシャツと短パンを引っ張り出してきた。

着ていた薄い生地ワンピースみたいなのをいきなり脱ごうとするので僕は慌てて部屋の外に出る。

障子の前に腰を降ろして待っていると、出かけるのか次兄がナップサックを持って通りかかった。

頭の良いこの二番目の兄は学校のネットを利用して友人達と商売のような事をしているらしく、夏休みでも忙しそうだった。

「はやいところ、自分のパソコン買ってつなげるようにしなきゃな。履歴とかクッキーとか消すの、めんどくせえし」

というのが最近の彼の口癖だ。

「何してんだ？お前…」

三兄よりは穏やかな性格をしている彼は、しゃがみこんで僕に視線をあわせてくる。

「ウノ兄…僕、ミツメを待ってるんだ」

「ミツメを？どっか行くのか？」

「坂の上のヒロさんち。ハチが産んだ子供を見に行こうと思って」

「ふうん…」

次兄は僕たち四人兄弟のなかで唯一顔立ちの系統が違っている。

長兄は母そっくりで、僕と三兄もどちらかというとそうなのだが、彼だけは死んだ祖父の面差しを受け継いで顎が尖っていた。

学者肌なところも祖父と次兄は似ているとは祖母の談だ。

将来髭を蓄えたら似合いそうなその顎を、彼はさっとなでた。

「…気をつけろよ？」

「き、気をつける？」

妙にひそりと声を潜めてくるので不気味なものを感じた。

「ネットでミツメの国のことを調べてみたんだけどさー結構やばいみたいだから」

「や、やばい？」

「今、サク兄が言ってたとおり国内がごたごたしてんだよ。もともと一つの国というよりいくつもの部族を寄り集めて無理やりまとめているようなところらしいから。特にミツメの部族はその宗教からして異色の存在で、ずっと国からの独立を唱えているらしい。あいつ、巫女だって言ってたよな。部族のなかでも重要な人間なんかじゃないのかなあ。サク兄が連れてきたのって、もしかして亡命か何かさせるつもりなんじゃ…」

僕が全然話についていけないことがわかったらしく、次兄はそこで話を切った。

「ま、頑張れよ」

勢いをつけて立ち上がるときさっさと玄関へと向かう。

「頑張るって？」

「守ってやれってこと」

……その後、次兄が背中を向けたまま出ていってくれたことは僕にとって幸運だった。

あの山のなかで襲ってきた熱さがまた耳の裏を赤く染めていたからだ。

次兄が玄関を閉めるのと入れ替わるようにして、ミツメが部屋から出てきた。

「じゃ、じゃあ行こうか」

手を引いた方がいいのかな、と思ったけれどもちろんそんなこと出来るわけがない。

何となく両手を握りこみながら僕はミツメより数歩先を歩いた。

両親は勤めに出ている。三兄は部活。次兄もさっき出かけてしまった。

家にいるのは祖母だけだ。

畑の横を通る時にその祖母が手ぬぐいを被って草取りをしているのが見えたので声をかける。

「はいはい、気をつけてなあ」

横にいる少女の腕があがるのを見て僕は驚いた。

曲がった腰を精一杯伸ばして手を振ってくれる祖母にミツメが大きく手を振り返した。

顔を見て更にぎょっとした。彼女の笑顔を見たのはそれが初めてだった。

第三の目があるというまろやかなおでこには早くも汗がにじんでいた。

た。

うちの国の言葉はとりあえず話せるらしいのに、その頃のミツメは必要最低限の受け答えしかしなかった。

僕達が進んで話し掛けなかったせいもあるのだけれども。

そんななかで、唯一祖母だけは、やれ、そちらとこちらでは蟻の大きさは同じかとか、茄子の花は必ず無駄なく実をつけるのだ、などというたわいもない事を常日頃語りかけていたらしい。

僕はそれをかなり後になって知った。

ヒロさんの家は山の腹に大きな穴をあけてそのなかに家を建てたみたいな感じだ。

辿り着くまでの緩やかな坂道は両側から木が枝を差し伸べてくれていたので夏でも涼しかったけれど、その分昼間でも薄暗くて、少し怖い。

だけど、僕は夏のこの道が好きだった。

重なりあう枝や葉っぱの間から差し込む光がアスファルトの上で描く面白い模様を眺めたり、スケッチするのはとても楽しかった。

ヒロさんが可愛がっている犬、ハチの絵も一枚描いたことがある。

ハチはラリトと同じ薄い茶色の毛並みをしていた。

何でも日本南方のある島にだけ生息する犬種で、すごく運動神経がよくて勇気がある犬なのだという。

ヒロさんは猟犬にするためにわざわざツテを辿って、その島の人か

らハチを貰ってきたのだそうだ。

ハチが仔犬を産んだと聞いて、僕はすぐにでも会いに行きたいと思ったのだが、二ヶ月程待つてくれと言われて我慢していた。

なんでも、生まれたばかりの仔犬にあまり人間が近づきすぎるとこの犬種は気性が荒いので母犬が子を守ろうとして食べてしまうらしい。

「守ろうとして…食べちゃうの？」

納得がいかなかった僕の頭を、髪も髭も白いヒロさんはぽんぽんとたたいた。

「人間にはわからないだろうけど、それが犬の愛情っちゅうやつじや」

そう諭されても、まだ、僕にはぴんときなかった。

坂道を登りきると、家が建っている丸い敷地を半円を描いて囲む石垣がある。

それが切れている所から入り込み、色んな花が咲いている庭先にミツメを待たせておいて、いつも挨拶をするお勝手口へと廻った。

「こんちわ！仔犬見せてー！」

返事がない。留守なんだろうか。

ここの家の人は皆勤めに出ているけど、ヒロさんだけは大抵家にいて畑仕事とかしているのに。

僕がもう一度声をかけようとした時、いきなりわんわんという犬の鳴き声が聞こえてきた。同時に、ヒロさんの叫ぶ声も。

嫌な予感がして声のした方へ向かうとハチの小屋の近くに出た。

仔犬を抱いたミツメに向かってハチが鎖をひきちぎらんばかりの勢いで吠え掛かっているのが見えた。それを宥めながら「あんた、誰だ？」とヒロさんがおろおろしていた。

「ご、ごめんなさい」

僕も負けずにおろおろしてミツメとハチの間に割り込んだ。

ハチは今まで見たことのないような、怖い顔をして唸っていた。口の端っこをめくれあげさせて牙を剥いていた。

皆が怒ったりうろたえたりしているなか、ミツメだけは平然と、手のなかの仔犬を撫でている。

順番抜かしのズルをされたような気がして僕は少し腹がたった。仔犬をこの近所で一番に抱かせてもらうのは僕だという約束だったのに！

「そん子はユキの友達か？黙って人ん家に入っては駄目やろう」
普段優しいヒロさんが荒い口調で言った。身が縮んでしまいそうだった。

「ご、ごめんなさい。あの、この子、外国の子でよくわかってなくて…ミ、ミツメ、謝んなきゃ…いきなり仔犬に触ったらだめだよ。ハチが、わんわんって怒っているじゃないか」

ミツメは濃い線で輪郭が描かれた金茶色の瞳だけを僕の方へと動かし、

「…ぼおう、ぼおう、だ」

「は？」

「犬の鳴き声は、ぼおうぼおう、だろう？」

ミツメが口にしたのは犬の声の擬音だった。けれど、僕にはそれが火が燃える時の音としか思えなかった。

彼女はそのまま謝る様子もなく、仔犬の毛並みのなかに鼻先をうずめて目を閉じてしまっている。

僕もヒロさんも呆然としてしまった。

「…なんで、外国ん子がこんなところにいるんじゃ？」

「サク兄がつれてきたんです」

「サク？ あん、跡取で大学まで出してもろうたくせにふらふらしとる奴か。何しとんのかのお」

言いながら、ミツメの素性がわかって安心したのかヒロさんがいつもの皺いっぱいの笑顔を浮かべてくれた。

肩からかけていたタオルで汗をぬぐう。

僕も額の汗をぬぐって息を吐いた。

「犬の子を見にきてくれたんか？」

「うん、二ヶ月たったからいいよね？」

「おお、三匹生まれたけん、良かったら一匹持っていけ」

「それは無理だよ」

ミツメの腕のなかにいる子のふわふわとした毛や僕の足元に擦り寄ってきたもう一匹の子の湿った鼻先を見ていると、こいつらのうちの一匹でもうちに連れて帰れたらどんなにいいかと思った。

だけど、動物嫌いの母さんが許してくれるわけがない。「

私は町育ちの人間だから家が獣臭くなるのは嫌よ」と言われるに違いない。

僕はハチに目で「抱いていいかな？」と了解をとってみた。

ヒロさんに宥められて落ち着いたハチは頷いてくれた（ように見えた）。

自分の腹の下で騒ぎにも気づかず眠ったままの三匹目の子をペロリとなめてやっている。

僕は足元に擦り寄ってきていた子を、そっと抱き上げた。

覆う毛は見た目通り柔らかくて光に反射して光っている。そこが気に入った。鼻と目が真っ黒なものもよかった。

―ああ、本当に連れて帰りたい。

「―連れて帰る」

響いた声に僕はぎょつとしてミツメを見た。

心の内が読まれたのかと思ったが、そうではないようだ。

ミツメは仔犬をひしと抱きしめてヒロさんを見つめていた。

「―連れて帰りたい」

「だ、だめだよ、ミツメ。母さんに怒られる」

「……」

「母さん、動物が嫌いなんだよ、だから……」

今度は僕へと動かされた視線に、う、と喉で声がつまってしまった。金縛りになってしまったかのように動けなかった。

「よし、わかった」

ヒロさんがハチの喉元をくすぐりながら言った。

「とりあえず連れて帰ってやれよ。で、母ちゃんがどうしても駄目だつうたらまた連れてくるといい」

「……ヒロさん、ありがとう……ごめんね」

ヒロさんの気遣いに僕はまた身が縮むような思いで頭を下げた。

ミツメはというと礼も言わず仔犬を抱いたままさっさと歩いていってしまう。

「風変わりな子やのお」

ヒロさんは苦笑した。

「やっぱり、外国の子はどっか違うんかのう」

「……そうかも」

僕もヒロさんも彼女のことを気遣っているのに全然素知らぬふりだ。僕は彼女と仲良くなりたかったけど、それが無理なことのように思えて哀しくなった。

そもそも彼女の方は僕と親しくなりたいなど少しも思っていないように見えた。

大きく溜息をついたあと、僕はもう一度ヒロさんに頭を下げて、ミ

ツメの後を追った。
彼女はもう坂道を下り始めていた。

「…犬が好きなんだね」

追いついて横に並びながらそう話し掛けてみた。ミツメは無言のまま頷く。

「じゃあ、じゃあさ、ラリトが死んだ時哀しかっただろうねえ」
ふいにミツメが歩くのを止めた。

途端にそれまで感じていなかった、草の臭いを感じ、蟬の鳴き声が大きく聞こえはじめる。

草木に隠された坂道の途中で二人、顔を見合わせた。

―僕は動けなかった。

まるで彼女の額にあると言う第三の目で呪いかなにかをかけられたようだった。

「…見たことを、言わないでいてくれてありがとう」
「え？」

「…人に言われていたら、ラリトの魂があちらへ行けないところだった」

ミツメの発した「ありがとう」の声は数秒後に僕の脳味噌に到達し、その瞬間心臓は大きく跳ねた。

「向こうの国でもこちらに来てからも犬は私の一番の友人で―特に

ラリトは、すごく優しい犬で…愛していた」

「あ、あの…」

「ずっとお礼を言いたかったけど…皆、バーチャン以外は私のことを怖がっているように見えたから…」

「そ、そんなことないよっ」

僕は思わずそういう嘘をついてしまった。ミツメは目を閉じて頭を振る。

「私は巫女、だから。人に恐れられ遠ざけられるのは仕方がない。本当ならあまり話をしてはいけないんだ。巫女の声には力があるから。でも…」

お礼を言いたかった、とぼつりとつぶやいた。

言ったあと少しの間黙り込み、やがて「この犬を友達にしたい。カーサンは嫌がるだろうか？」と睫を揺らした。

僕は大きく頭を振った。

「ぼ、僕が頼んだら、きっと良いつて言ってくれるからっ」

これも嘘だった。母さんは僕のおねだりはあまり聞いてくれたことがない。

例のスケッチブックだって「そんなもの何になるの」と相手にしてくれなかったのだ。

だけど、今回ばかりはなんとしてでも願いをきいてもらうつもりだった。

その気持ちは嘘じゃなかった。

ミツメはまた僕をじっと見つめていたが、やがてゆっくりと唇を下弦の月の形にして、柔らかく笑った。

あの時山で感じたような手放しの感情が再び僕の全身に沸き起った。

「じゃあさ、君があんまり、その…笑ったりしゃべったりしないの

って、その、巫女だからなの？」

思い切って尋ねると彼女は俯いて腕のなかの仔犬を撫でた。

「…五歳くらいまでは、よく笑っていた。だけど、巫女に選ばれてからは、それは私にとって禁じられたことになった」

巫女には自身でも操れない不思議な呪力が宿っているとされ、その声や表情ひとつで人に様々な影響を与えてしまうことがあるのだという。

ミツメが無口で無表情なわけを、僕はようやく知った。

「こんなことを言ったら、お前に何が起こるかかわからない。だけど…」

どうしても、礼が言いたかった、とミツメは目をふせる。

あの時彼女が行っていたのは、やはり僕が思った通り鎮魂の儀式だった。

歌と踊りで魂を送り、遺体から流れた血を飲む。

また、その血を数日の間顔に塗り続ける。

それは彼女の部族においては逝く者に対しての最高の愛情を示す行為なのだ。

本来ならば人目を避けて密に行われるべき儀式を僕に見られてしまったことに、ミツメも随分悩んだらしい。

下手に騒がれたら、儀式を汚されたことになりラリトの魂が上手く死後の世界に行けなくなってしまう恐れがあるからだ。

つまり、彼女が顔に血を塗っていた期間、僕を睨んでいたのは「ばらしたら許さない」と脅しをかけていたということか。

口をすべらせなくて良かったと僕は胸をなでおろした。

「あのさ、君がしゃべるのが駄目なら、その、僕が話をしている？」
返事はしなくていいから、とどきどきしながら言うミツメがまた笑ってくれたので嬉しかった。

何よりも一番に彼女に告げたいことがあったけど、それから切り出

すことは出来なくて僕が口にしたのは家族のことだった。

長兄が去年いきなり大学をやめてしまったこと。
次兄と三兄にはいつも頭があげられないこと。

―その三兄と唯一本気で喧嘩をしたのがスケッチブックに落書きを
された時だということ。

ミツメは時折頷き、相変わらず感情のうかがえない、しかし、決して冷たいものではない表情で話を聞いてくれていた。

やがて両脇を木に守られた坂道は終わり、太陽の下に容赦なくさらされた。

思わず閉じた目を再び開けると、目のなかに飛び込んできたのは細い腕を掲げて光を遮っているミツメの姿だった。

それは、あの儀式を思い出させ、僕はぎゅっと胸のあたりのTシャツを掴んだ。

「あ、あのさ。ミツメ―」

今こそ、一番告げたいことを語るチャンスだと思い、僕は彼女へと顔を近づけた。

嫌がられるかな、と不安だったけれどミツメはきよとした顔でこちらを見ている。

「あの―」

「よおっ」

いきなり横から大きな声が響いてきて僕の言葉を遮った。
しゃあっと空気を裂く音がしたかと思うと坂道から下ってきた三台の自転車が僕達二人を囲むようにして止まった。

「：何してんの。ユキヲ」

僕と同じクラスのイノウエシガトだった。

それとやはり同じクラスのマツヤマとタカムラ。こいつら二人はいつもシガトの側にいたが、友達というより家来のようなだった。

僕はしまったと唇を噛んだ。

あの坂道の途中にはよその地区へと続く林道がくっついていてるのが、それを通して時々こいつらが遊びにくるのを忘れていた。

うちの地区には僕達兄弟くらいしか子供はいないし、ましてや学校の同級生なんて誰も通らないでいるだろうと思って安心していたのに。

シガトはじろじろと僕の背後のミツメを見たあと、二人と何かこそと囁きあいながらくすくすと笑った。

僕は彼らが苦手だった。

おどおどしている僕の性格が気に食わないのか、しょっちゅうささいな嫌がらせを仕組んでくるからだ。

表だって喧嘩をしかけてくるとか、漫画に出てくるいじめっ子のようになにごく理不尽な命令をしてくるとかならば、まだ、何とか対処の方法があったかもしれない。

でもシガトが僕にすることはいつだって影で仕組まれて、犯人が彼

とわかっていのに、それをはっきりと糾弾出来ない状況を作り出してくるので、ただ、我慢するしかなかった。

例えば――

朝の朝礼で並んでいる時、背の低い僕の背後でずっとそこそこ話が続けられている。

「髪の毛が跳ねてる」とか「靴が去年から同じ」などという囁きが笑い声とともに耳に忍び込んでくる。

ついには「ここまで言われてもまだ自分のことだってわかってないのかな」というシガトの幾分大きめの声が聞こえてくる。

わからないわけではない。

どう撫で付けてもおさまり切れないくせっ毛や古びてしまった靴のことは自分が一番気にしているのだから。

でも、だからと言って腹を立てて彼らに文句を言ったり、睨みつけてもどうにもならなことだってわかっていなのだ。

そうしても、にやにや笑いながらその場では視線を逸らされ、後で逆らった罰だと言わんばかりに僕の机の上にエッチな雑誌を広げられたりするだけなのだ。

「別に：散歩しているだけだよ」

「さんぽ！」

シガトが声をあげると何がおかしいのか、あとの二人が今度は声をあげて笑った。

「その子誰？外国人？」

「うん」

言いながら、僕はさっさとその場を通りすぎようとしたが、マツヤマが自転車ごと回り込んできて邪魔をする。

「もしかしてデート？」

「で、デートっ?!」

僕が声を上ずらせると、三人はまたこそそと囁き合いながら笑う。

「色が黒いよな…」

「でもお似合い…」

「変な女…」

その時誰かが「変な女って何だよ!」と怒鳴る声がした。

三人が驚いた顔で僕を見ている。

叫んだのが自分だとそれでようやく気づいた。

「変な女って彼女のこと? 訂正しろよ!」

「カノジョ!」

またシガトが声をあげた。

他の二人が先ほどと同じように笑おうとしたが僕はそれを遮った。

「訂正しろよ!」

思いも寄らない反応にシガト以外の二人がうかがうように主の顔を見た。

シガトはというと自転車から降りると、顔をにやけさせたまま僕とミツメの前に立った。

「ごめーんねっ」

詠うような節回しをつけて言った瞬間、瞳にぎろりと剣呑な光が宿った。

―新学期になったら覚えていろ、とそれは語っていた。

「ユキヲ、格好いいーっ!」

シガトが拍手した。

二人もそれに習った。彼らの笑みは昔見た、南半球のどこかの国を特集していたテレビ番組を思い出させた。

それに出ていたある部族は、戦いの時には笑みを浮かべるのが決まりなのだそうだ。

笑いながら彼らは敵に剣をふるっていた。

いつもの僕ならば、その時点ですっかり萎縮してしまっただけに違いがない。だけど。

「ま、真面目に言えよ！」

だけど、今日は違った。

人間というのは心の底から怒った時は何も怖くなるのだと知った。

この間、三兄に向かっていった時のように、後々自分にやって来る嫌がらせなんてささいなことに思えたのだ。

僕の勢いにシガトは白けたような顔をした。

「んな、真面目に怒らなくてもなあ…」などつつぶやきながら、僕の肩越しにミツメへと視線を向ける。

次の瞬間、彼はまた見覚えのある表情をした。

それは、ミツメと初めて出会った時の三兄のものと同じ表情だった。僕は背を向けたままだったので、彼女の様子は見えなかったが、シガト達が脅える理由はわかる気がした。

あの儀式の時に感じたような強い気を、ミツメは今、発しているのだ。

映像でしか知らなかった野性の虎を初めて目の当たりにしたようなもののだろう。

命の芯にあるモノの格が、僕らと彼女では違いすぎるのだ。

「―そこをどけ」

巫女である自分の言葉には力があると言っていたが、それは本当かもしれない。

まるで、操られたようにシガト達は身を引き、ミツメは開けた道を僕の手を引いて歩き始めた。

もう片方の手のなかでは仔犬が吞気に眠っていた。

ちょうど風がふいてきて、興奮と日の光で熱くなっていた体に心地よかった。

例え新学期になってどんな嫌がらせを受けても僕は前ほど苦にならないだろうと思った。

当時、僕の心はいつも揺らいでいた。

自分に自信がなくて、人の反応や周囲の状況に影響を受けずにはいられなかった。

唯一自分の中にある確かなものは、絵が好きで描きたくて描きたくてたまらない、という想いだったけれど、それさえもこの田舎では変わり者扱いされる理由になるということで、はっきりとは表明できなかった。

だけど、そんな考えはミツメの踊りを見た時以来、僕のなかで薄くなっていた。

ミツメといると、ふにゃふにゃだった自分の中身がどんどん固まって強くなっていくような気がした。

誰に何と言われても、僕は彼女と仲良くなりたかったし、それに――。

その夜、僕の決死の頼み込みと祖母の口添えで、母はしぶしぶ仔犬を飼うことを認めてくれた。

良かったねと言った僕へミツメが見せたかすかな笑みに、祖母以外の皆が目をまるくしたのが、妙に笑えた。

第二章（後書き）

ようやく、二人が会話してくれましたW

第三章

仔犬の面倒を見るのは僕とミツメ、二人の仕事となった。

トイレの躰をして、朝と夕方には一緒に散歩に連れて行く。

野菜とお肉を煮込んだ特製のご飯も作った。

散歩の途中、僕と仔犬がどんなにはしゃいでいてもミツメだけは決して声を上げなかった。

だけど、いつのまにか僕は些細な表情や声の変化で、何となく彼女の感情が読めるような気になっていた。たぶん、それはうぬぼれではなかったと思う。

ある日、次兄がどこからか金魚を二匹貰ってきた。

ミツメがそれを見て大きな瞬きをしたので、僕は仔犬と同じように彼女と二人でその金魚の世話をすることを申し出た。

案の定、ミツメはほんの少し笑った。

また近づけたような気がして嬉しかった。

ミツメは自分の力を恐れてか、相変わずほとんど話をしなかった。ので、いつも僕が一方的に語りそれを彼女が聞くという形だった。時々、退屈していないかな、と不安になったけど、そう思ってミツメの顔を見るとすうと目を細めてくれたので安心した。そんなとりとめのない時間が流れていくなか、ある時、突然、ミツメが口を開いたことがあった。

「時々、夢を見るんだ」

「夢…？」

僕達は仔犬―名前はシデとなった―を連れて朝の川原に散歩に来ていたところだった。

川から立ち上る靄がまだ弱々しい朝日に反射してきらきらと光っている。

時折水面近くに浮かび上がってくる魚達が川の流線を不規則に乱していた。

シデは楽しげに草の間から跳ね上がるバツタを追っている。

僕の顔と並んで川面に写されたミツメの顔が少し疲れているようだったので、僕は心配になった。

「怖い夢、なの？」

「赤い手と青い手に八つ裂きにされるんだ」

想像してみても、ぞおっとした。同時にミツメが可哀想でたまらなくなる。

「その、やっぱり、慣れない国で疲れちゃったのかなあ。だから、そんな夢を…」

「それは、違う！」

今まで聞いたなかで、一番大きな声でミツメがいった。

言葉は続かず、少しの間、転がって遊ぶシデを見たあと、僕に視線を移し眉間に皺を寄せた。

「私は…この国にいるのが嫌ではない。いいや、むしろ…。だけど、それは…」

それは許されないことなんだ、と彼女はしゃがみこむと顔を両手で隠した。

「どうして？何で許されないのさ。君が楽しい想いをして何が悪いの？」

「…私の部族は、今皆つらい目にあっている。なのに皆を守らなければいけない巫女の私が、こんな風に…だから、罰として神はウリトの命を奪ってしまったのかもしれない」

「そんな…」

言いかけて、僕は口をつぐんだ。

僕達の国では、一年の色んな行事の時に神様を拝んだり、願いごとをしたりするけれど、一体どれだけの人間が神様の存在を信じているか疑わしい。

ミツメのように、いつも心に神様の存在を感じている人なんてほんの少しだろう。

そんなひどい事するのは神様じゃないよ、と僕は言おうと思ったけれど、それは巫女である彼女には言ってはいけないことだと思った。

「僕は…君がこの国で楽しく過ごしてくれることが嬉しいよ」

―君に出会えて嬉しいよ。

そんな風に僕がいくら言葉を尽くしても、ミツメの悪夢を消すことが出来るとは思えなかった。でも。

僕は姿さえも想像できない異国の神にその朝心から祈った。

どうか、彼女を許してやってくださいと。

僕達が並んでしゃがみこんでしまったので、仲間はずれにされたと思ったのか、シデが声をあげて間に飛び込んできた。

「ああ、もう、朝からわんわんって元気だなあ。お前は」

僕が苦笑してシデを抱き上げると、ミツメが顔を手のなかに埋めたままつぶやいた。

「ぼおう、ぼおう、だ」

「だから、それだと、まるで火事みたいだってば」

「わんわん、こそ奉納歌をへたくそに歌ったときの山のこだまのようだ」

ミツメが顔を上げた。

唇を尖らして、じろつと僕を睨んだあと、やがて、ふっと表情を緩めた。

目が赤く潤んでいたけれど、それを見て僕はほっとした。

「ねえ、ラリトは死んでしまったけれど、シデはこんなに元気だよ」
僕がそう言ってシデのころころ太った体をミツメに手渡すと彼女はシデが痛がるくらいきつく抱きしめていた。

違う国で生まれて神様のことなんてろくに考えたこともない僕には、完全にミツメの苦しみを理解するのは不可能なことなのだ。
その夜、僕はそんなことを思っただけで眠れなくなってしまった。
神経が冴えてしまって、二段ベットの上から聞こえてくる三兄の寝息が妙に耳につく。

羊を数える気にもなれず、閉じた瞼の裏にミツメの姿を思い浮かべてみた。

まっさきに浮かんだのは、Tシャツにジーパン姿の彼女だったので、それを、儀式を行っていた時の緑の衣装に変えさせた。

ふいに思いついて、宝石がいっぱいついた冠を彼女の頭に乗せてみ

ると結構似合う。

ミツメはきりつとした顔をしているので、まるで女王さまみたいだと思った。

少し、照れくさいけれど横に同じように冠をつけた自分を並べてみる。

僕達が治める王国があつたらしいのに、と思った。

そこでは、ミツメが何をしても誰も、そう神さまさえ咎める事が出来ないのだ。

そこでは彼女は思い切り笑い、歌い、僕と遊ぶのである。

そんなことを考えていたら少し楽しい気分になって、ようやく眠ることが出来た。

その翌朝、ひとつの事件が起こった。

山に囲まれた僕達の地区は、夏でも朝夕は涼しい。

特に朝はとても清々しいのだが、それを切り裂くような悲鳴が上がった。

母の声だった。

ミツメ、と彼女が呼ぶのが聞こえたのでタオルケットを蹴っ飛ばして寢床から抜け出した。

「な、何があつたの？」

台所で母が口を両手で抑えて、脅えた顔でミツメを見ていた。

ガスレンジの上の鍋からはみそ汁の香りがして、テーブルの上には

作りかけの弁当が並べられていた。いつも通りの光景だった。

特に何かが起こったという風には見えず、僕は「どうしたの」と再度尋ねてみる。

ミツメはというと、いつもの表情のない顔でテーブルの横に立ち、僕の方を見ていた。

「こ、この子、金魚飲んだんよ!」

「金魚?」

言われて、流しに空の金魚鉢があるのに気づいた。

濡れたそれを持ち上げて上からのぞいてみたけれど、もちろん何もない。

「金魚、どうしたの? 母さん」

「: 死んでたんよ」

ふうと息を吐いて、そっと僕へと身を寄せてくる。

「さっき母さんが起きたら、腹を上にして二匹ともぷかぷか浮かんでたから、畑に捨ててこようとしたんよ。そしたら:」

「そんな、捨てるなんて:」

いくら動物が嫌いでもひどい、と抗議しようとしたら母さんの眉が跳ね上がった。

「何言ってるの。金魚の死体なんて気味の悪いもの、いつまでも家のなかに置いておけるわけないやろ!」

本当に、気味悪がっているらしく二の腕に浮いた鳥肌をしきりと撫でていた。

「じゃ、じゃあ、母さんが捨てようとした金魚を:」

「この子が飲んだんよ。ああ、嫌だ」

母が運ぼうとしていた鉢のなかにいきなり手をつっこんだかと思うと、止める間もなく手の平に乗せた金魚をするりとその喉のなかへと流し込んでしまったのだそうだ。

「そ、その…」

「あまり、気持ち悪い事せんで欲しいわ」

ミツメがしたことは、確かに母さんから見たら不気味な行いかもしれない。

だが、彼女にとってはそれは死んでしまった金魚への鎮魂の儀式なのだ。

踊りをささげる時間がないと思った彼女はせめて金魚を飲むことで魂をあのに送ったに違いない。

僕はそのことを母親に説明しようとした。

だが、その前にミツメに腕を抑えられてしまった。

僕を見たあと頭を振った彼女は、そのまま自分の部屋へと向かっていった。

「ミツメ…」

しばらく考えたあと、僕はとりあえず顔を洗い寝巻きを着替えた。皆と一緒に朝食を食べたあと（ミツメは部屋から出てこなかった）、両親と兄達が出かけるのを待つて隠していたものをベットと壁の間から引っ張り出す。

スケッチブックだった。

それを抱えてミツメの部屋に向かった。

声をかけて障子を開けると彼女は窓枠に腰掛けて風を受けていた。

「ミツメ、その、母さんのことごめん…」

ミツメは黙ったまま、頭を振る。

表情のない顔のなかで目だけが揺れていて、僕は彼女の内の傷を感じた。

「僕は、知っているから。君がしたことが大好きな金魚を天国に送るための行動だってこと」

ブンカのチガイで、お母さんにはわかってもらえないみたいだけど、と僕は次兄の言葉を借りた。

「でも、いつかはわかってもらえると思うんだ」

僕も最初に君の儀式を見た時は怖かった。

だけど、舞う姿を見た時に、そういう怖いとか気味が悪いとかいう小さな思いは消えてしまっ、ただただ圧倒されてしまった。

照れくさを我慢して、僕は話した。

「君にはそういう力があるんだよ。ブンカなんて飛び越えちゃって、人を、ええと、感動させる力が」

これを見て、と僕はスケッチブックを広げた。

裏表紙に刻むようにして描いた彼女の姿を見せるのは恥かしくて、顔が熱くなった。

「本当はね、僕はあの日絵を描くのを諦めるために、あそこに行っただよ」

絵を描くのが好きでたまらなくて、将来はそっちの学校へ通いたいと思っていた。

だけど、前日、思い切って放課後、学校の先生に相談したところ、

彼は僕の絵を見たときとたん軽く噴出したのだ。

噴出したあと、しまったというような顔をした。

先生には悪気はなかったのだ。

それだけに、それはあまりにも正直な反応で僕を絶望させるのに十分だった。

絵が好きだなんて、将来、その勉強をしたいなんて、やっぱり表に出すべき望みではなかったのだと、僕は先生の手からスケッチブックをひったくると教室から駆け出した。

ミツメも笑うだろうか？

僕が描いた彼女の絵は、体が歪んでいる気がする。

でも見て欲しかった。あの日、自分がどれほど僕に衝撃を与えたか知ってほしかった。

「だけど、君に会ってから、そんな考え吹き飛んじやったんだ。ミツメ、僕は君の踊っている所の絵が描きたい。君に――モデルになって欲しいんだ。僕の絵の」

僕はミツメの顔を見る事が出来なくて目を伏せたまま彼女に開いたスケッチブックを手渡した。

しばし、部屋に静けさがおりてきて、やがて、突然、紙を裂く音がした。

「え……」

驚いて顔を上げた僕が見たのは、自分の絵が描かれた厚紙を、力任せに裂こうとしているミツメの姿だった。

「……ミツメ？」

何が起きているのかわからなくて、呆然とつぶやいた僕の胸元をミツメが掴んでくる。

ミツメの絵の部分がずたずたにされたスケッチブックは畳の上に放り出されてしまっていた。

「……！……！！」

ミツメが何かを叫んだが、それは僕にはわからない言葉で発されたので、反応が出来ない。

初めて聞くミツメの母国語だった。

「ど、どうして……？」

金茶の目からぽろぽろと涙がこぼれる。目尻がつりあがる。

「……！」

目の前にいるのが、ミツメなのにミツメでないような気がした。

「何故、怒ってるの？」

「……………」

「わからない、僕にはわからないよ……！」

ぎりとミツメが自分の唇を噛んだ。

手を一度離したかと思うと、次にはその両手で僕の胸を突いてきた。すっかり動揺していた僕は、みつともなく尻餅をついてしまう。

喉に何かが詰まって咳が出た。

「ミツメ……？」

見上げると、ミツメが両の手を握り締めて僕を見おろしていた。

その目の色は冷たくて、僕はまるで自分が罪人か、もしくはひどく汚いものになったような気がした。

「なんで？ わからないよ……！」

涙が出た。

ミツメの前で泣くなんて、と思ったけれど耐え切れなかった。

ミツメの表情が緩み、口が物言いたげに二、三度開いた。

だが、結局彼女は何も語らず、乱暴に障子を開けると飛び出してしまった。

後を追おうとしたけれど、溢れる涙が視界を遮って走ることが出来ない。

わからないよ、と僕はもう一度叫んだ。

第三章（後書き）

ケンカしてしまいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323h/>

あかいくに

2010年10月10日04時37分発行